

平成16年度 卒業論文

現代の日本の大衆音楽におけるジャンル分け

—「ロック」と「ポップス」をめぐって—

富山大学 人文学部 国際文化学科

文化人類学コース

2005年提出

2026年、原本をもとに本文を起こしたものです。

明らかな誤字のみ改め、内容と文体は原文のままとしました。

もくじ

はじめに

第一章 ロックとポップス

第一節 ロック

第二節 ポップス

日本の音楽シーンの年表（1950～2000）

第二章 ロックとポップスの分類

第一節 レコード店でのジャンルの分け方

第二節 リスナーによるジャンルの分け方

第三章 まとめと考察

アーティストのリスト

文献リスト

はじめに

私たちの生活の中には、音楽を耳にしない日はないといえるほどに音楽があふれている。それはテレビやラジオなどで耳にする音楽、スーパーや雑貨屋などでBGMとして耳にする音楽、CDとして消費される音楽など様々だ。私たちの望むと望まないとに関係なく、生活する上で音楽はいやでも耳に入ってくる。そしてテレビやラジオで流れてくる音楽、BGMとして流される音楽のほとんどはそのとき流行している音楽である。それらを耳にする私たちは雑多な音楽をなんとなく区別し、分類している。音楽を消費する側にとって、レコード会社による「ジャンル分け」は大きな助けとなる。すなわち、レコード会社は、「ジャンル」と称し、消費者が商品を選びやすいように便宜的に楽曲やアーティストを分類して提示する。しかし音楽ジャンルの画定にははっきりとした基準は存在せず、あいまいな分類基準が私たちの間で共有されているだけなので、この音楽はいったい何というジャンルに分類されるのかわからないという状況がしばしば起こることとなる。

たとえば、レコード店には商品を分類する表示として「クラシック」「演歌」などと並んで「ポップス」がある。ここでいう「ポップス」とはポピュラーミュージックの略語であり、大衆に受け入れられ、親しまれている一群の音楽形式を指しているように思われる。「ポップス」における分類基準は非常におおざっぱなものである。「ポップス」の分類基準は確定されておらず、はっきりとした定義があるわけではないが、おおそクラシックや民謡、伝統音楽以外のものを示していることは確かである。しかしそれ以外のロック、R&B、ヒップホップ、ソウル、テクノなどは「ポップス」に含められたり、そうでなかったりして境界があいまいである。また、ポップスは流行歌でもあるので、時代によっても流動する。そうかと思えば、30年前に「ポップス」として分類されていた楽曲がいまだに「ポップス」として分類される場合もある。「ポップス」という分類基準は、時代によって様々に変化しながら、現在ではある種の領域をもった音楽ジャンルとして発展しているようだ。しかし、流行音楽を記述的に指し示す「ポピュラーミュージック」という用語と、「ポップス」とは違った意味をもっているように私は思うのである。「ポップス」とは、音楽に日々接し、消費する人々が慣用的に使う用語であり、民俗分類としての性格をもっている。

たとえば「ロック」と総称される音楽は、大衆音楽であり、ポピュラーミュージックに含めることができるはずである。ところが私は「これはロックだがこっちはポップスだ」とか「俺はこれをロックだとは認めない」という話をよく耳にし、そういった話に参加することもある。こういった会話は私の周りだけでおこなわれているものではないだろう。こういう会話が存在することから、「ポピュラーミュージック」と「ポップス」とは、分類基準として重なり合わない部分をもっていることがわかる。要するに、「ポップス」とは、多くの人が気軽に楽しめる、様々な現代的な音楽をおおざっぱに指し示す概念であり、ロックであれ、テクノであれ、音楽の形式とは関わりなく存在している。これに対して、たとえば「ロック」のように比較的明瞭な音楽形式をもつ音楽ジャンルが存在し、これに愛

着をもち、深い理解をしていると自覚する人々は、「ポップス」と、自らの愛する音楽形式を差別化したがるようなのである。「ポップス」という分類基準は要するに消費形態に基づくものであり、「ロック」のような音楽形式に基づく分類基準としばしば対立し、緊張した関係にある。この論文ではその現象の実態を、「ロック」といわれている音楽ジャンルと「ポップス」の関係に焦点を当てて調査する。第一章では「ロック」と「ポップス」の音楽ジャンルとしての音楽史的背景と発展の歴史的過程を明らかにする。第二章では売り手であるレコード店の関係者と、これに対する買い手としてのリスナーから聞き取った話をもとに、「ロック」と「ポップス」が人々の間でどう把握されているかを紹介する。そして第三章では「ロック」と「ポップス」という、部分的に重なり合いつつも異なる音楽の分類概念の関係を明らかにし、両者がリスナーの間でどのように認識されているのか考察することにする。

付け加えて、本論でもちいる用語について説明しておきたい。本論では「アーティスト」と「ミュージシャン」という言葉が出てくる。アーティスト〔artist〕とは本来芸術家のことだが、音楽業界の用語では演奏家の意にももちいられる。この論文では、音楽を作曲したり演奏したりする、音楽の担い手一般を「アーティスト」と呼ぶ。ただし、「ストリートミュージシャン」など、演奏家としての面がクローズアップされる場合には「ミュージシャン」と表記することにする。また、「リスナー」とは音楽業界でもちいられる用語で、専門知識をもたない一般の聴取者という意味と、音楽の消費者という意味が込められる。

第一章 ロックとポップス

第一節 ロック

ロックという音楽の形式的な定義は非常に難しい。ロックを定義することには意味がないとまでいわれる。しかしロックファンの間ではロックはひとつの音楽ジャンルとして厳然と存在すると認識されており、「ロックであること」と「ロックでないこと」は明確に区別されている。ではロックという音楽はどのようなものなのだろうか。なぜロックの定義は難しいのだろうか。

1 ロックとは何か

ロックというジャンルには多くのサブジャンルがある。ロックほどサブジャンルの多い音楽ジャンルも珍しい。このサブジャンルの多さがロックの定義を難しくしている理由の一つである。思い付く限りでもロックンロール、ロカビリー、ハードロック、サイケデリックロック、グランジ、パンクロック、ヘビーメタル、ハードコアなどロックのスタイルは様々である。様々なスタイルがある中でロックとそうでないものを分けているものは一体なんだろうか。8ビート、4ビートという言葉は日本のミュージシャンはよく使う。8ビートとは八分音符を基本的なビートとしたリズムパターンで、4ビートとは四分音符を基本としたリズムパターンである。一般的に8ビートはロックのリズムであり、4ビートはジャズのリズムであるといわれる。確かにロックには8ビートの曲が多く、ジャズには4ビートの曲が多い。しかし8ビート以外のロックの曲は無数に存在するし、8ビートのジャズも存在する。だとすれば、このリズムだからロックである、というように、ロックをリズム的に定義することはできない。

また、ほとんどすべてのロックバンドにはギター、ベース、ドラムの三つの楽器が含まれている。そのなかでもギターは目立つ音で、メロディを奏でたりソロを取ったりすることが多い。そのためギターはロックバンドの花形であり、ロックといえばギター、というようにロックを象徴する楽器である。しかしギターはフォークやジャズ、クラシック、ポップスなど他ジャンルの音楽にも登場するため、ギターがあるからロックであるということとはできない。しかしギターの中でもエレクトリックギターは、フォークミュージシャンであったボブ・ディランがそれまでのアコースティックギターに替わりエレクトリックギターをもちいることで「フォークロック」という呼び名が生まれたことからわかるように、ロックのイメージを代表する楽器といえる。ディストーションを効かせた大音量のエレクトリックギターは確かにロックで多用され、ロックの音の象徴となっている。しかし、現在ではこのようなエレクトリックギターもまたポップス、ジャズ、R&Bで多くもちいられており、エレクトリックギターがあるからロックであるともいいきれない。

聞き取り調査で「ロックと聞いて思い浮かぶもの」を尋ねたところ、音楽の内容よりもむしろ、ギターの演奏、バンドでの活動、皮ジャンの着用など見た目で判断される場合と、

激しい、やさぐれている、反社会的であるという精神的な姿勢で判断される場合が多かった。このように見た目や精神性など、音楽形式からは離れた側面からロックと判断される部分もある。よくロックは反抗的な音楽であるといわれる。たしかにロックには社会に対して反抗的な内容を訴える歌詞が多い。また皮ジャンやリーゼント、パンクロックに見られる逆立てた髪、非日常的なファッション、メイクなどは社会に対する反抗心のあらわれであるという見方ができる。すなわち社会の束縛から逃れ、自由でありたいという若者がもつ欲求をストレートに表現した音楽、それがロックである、だからロックはいつも反社会的なのだ、というような見方はロックのひとつの重要な側面を表している。ロックを機械的に定義することは難しいが、共通の音楽形式と、反抗的な精神性によって特徴づけられる一群の楽曲ということができるだろう。

2ロックの始まり

ここで、大まかにロックの歴史について触れておくことにする。ロックは「ロックンロール」として1950年代のアメリカで生まれた音楽ジャンルである。ロックンロール〔Rock 'n' Roll〕という言葉の意味は元来「セックスをする」という意味の黒人の俗語であるロック〔Rock〕とロール〔Roll〕が合成されたものである。そもそも、ロックとロールという言葉为题名や歌詞に含む曲はリズム＆ブルースに数多く発見できる。その「ロックしよう」や「ロールしよう」という言葉が「ダンスをする」、「パーティーで楽しむ」といった意味でももちいられるようになったのだ。このリズム＆ブルースの婉曲表現としてロック・アンド・ロール〔Rock and Roll〕という言葉が誕生し、その綴りが〔Rock 'n' Roll〕となってロックンロールという言葉が生まれたのであった。

ロックンロールはまた、それまで白人用の音楽と黒人用の音楽がはっきり二分されていたアメリカの音楽シーンにおいて、初めて白人の音楽と黒人の音楽の垣根が取り払われた事例でもある。1950年代に黒人の間で人気があったブルースとR&Bが、白人に支持されてできた音楽ジャンルがロックンロールであった（みつとみ、1999）。1955年頃にニューオーリンズで活躍したR&B歌手、ファッツ・ドミノやリトル・リチャードらは白人の間でも人気があった。1950年代、白人向けのラジオ局は黒人向けの音楽をまったくかけることはなかったが、ファッツ・ドミノとリトル・リチャードの音楽だけは例外的に白人の間でまたたく間に浸透していった。もともとR&Bとしてあった黒人音楽を、あるラジオ局がロックンロールと呼ぶようになってから、この黒人音楽は白人社会において最も重要な音楽ジャンルとなっていくのである。

ロックンロールはその後、黒人による白人向け音楽という位置づけから、白人が演奏する白人のための音楽という意味あいをもつように変化していく。最初のロックンローラーがチャック・ベリーという黒人であり、その後ボ・ディドリーやファッツ・ドミノなどの黒人ロックンローラーが誕生したにもかかわらず、ロックンロールは黒人音楽としてではなく白人音楽として白人社会に受け継がれていくこととなったのである。一度はロックン

ロールの成立によって黒人音楽と白人音楽が融合したかにみえたが、ロックンロールはロックとなって白人のための音楽に、R&Bはソウル、ファンクへと姿を変えて黒人の音楽になっていくのである。ロックということばは白人用、R&Bということばは黒人用としてわけられるようになるといういいかたもできる。若者の社会不安、大人への反抗をテーマにした1955年の映画『暴力教室』のテーマ『ロック・アラウンド・ザ・クロック』を歌って大ヒットさせたのは白人ロックンローラーのビル・ヘイリーであった。またその後ロカビリー、ロックンロールのカリスマであるエルヴィス・プレスリーの登場によって、ロックンロールが白人の音楽として確固たる地位を築いていくこととなる。ロカビリーとはブルースのリズムパターンと、白人音楽であるカントリー、ヒルビリーなどに影響されたギターカッティングとが合成されてできた音楽ジャンルである。初期のエルヴィス・プレスリーはエレキギターとウッドベースをもちいており、カントリーやヒルビリーに近いスタイルを採用していたため、ロカビリーといわれた。このエルヴィス・プレスリーの登場以降、ロック界には数多くのスターが誕生するが、そのほとんどが白人である。白人のロックスターの名前はいくらかでもあげられるが、黒人のロックスターはほとんどあげることができない。「ビートルズ」、「ローリングストーンズ」、「クリーム」、「レッド・ツェッペリン」、「ドアーズ」、ボブ・ディラン、「セックス・ピストルズ」など、白人のロックスターをあげればきりが無いほどだが、この中で黒人はジミ・ヘンドリクスとプリンスなどの例外を除いてほとんどあげることができない。この事実がアメリカの人種差別問題と深くかかわりをもつことはいうまでもない。

ロックという音楽をあらわす重要な要素である反社会性はロックンロールの時代にすでに現れていた。『暴力教室』は若者を主人公とした初めての映画であった。それまでの大人と子供しか主役となつてこなかった映画において「10代の青春」が初めてクローズアップされたのである。高校生の非行を扱った映画『暴力教室』の主題歌『ロック・アラウンド・ザ・クロック』をビル・ヘイリーが歌って以来、ロックンロールやロックには常に若者に特有の反社会的なイメージがともなうようになったのである。

3 日本のロック

日本のロックはロカビリーから始まる。1958年に第一回日劇ウェスタン・カーニバルが開催される。ここでプレスリーに影響を受けた平尾昌章、山下敬二郎、ミッキー・カーティスが人気を集め、ロカビリーブームになったことが日本のロカビリーの始まりである。その翌年、フジテレビの「ザ・ヒットパレード」などでロカビリー歌手による洋楽をカバーした曲が1960年代初頭まで人気となる。もっとも、このころの日本のロカビリーはアメリカの楽曲のカバーであった。1959年になるとオリジナル曲が台頭するものの、大半のロカビリーが歌謡曲化してロカビリーブームは急速に冷めていくのであった（様原、1996）。

1966年には「ビートルズ」の来日の影響から「GS（グループサウンズ）」がブームと

なった。「グループサウンズ」とは和製英語であり、欧米には存在しない日本独自の音楽ジャンルである。そろいの細身のスーツに身を包み、それまでにない「ロックな」パフォーマンスを誇示する数多くのグループが登場した。「スパイダース」、「タイガース」、「ブルー・コメッツ」、「テンプターズ」、「ゴールデン・カップス」などのグループがヒットを連発するが、GS ブームは1969年には急速にしぶんでいく。GS の代名詞のような扱いを受けたジュリーこと沢田研二に代表されるように、アイドル化したGSは次第に歌謡曲となっていくのであった。

1960年代末になると、英米ではたんなる8ビートの循環コードを基本とする音楽はもはやロックとは呼ばれなくなっていた。世界的な反体制運動に呼応するように、既成の音楽や芸能を解体する意思を備えていることがロックの特性となったのである。ロックに精神性や思想性、芸術性が問われるようになったのだ。しかし日本の音楽界にはこのような新しいロックを消化するだけの技量も伝統も、大規模な音響機材を利用するだけの資産もなかったのである。そのような状況の中で現れたのがフォークであった。「フォーク・クルセダーズ」、「ジャックス」らに代表される当時の日本のフォークミュージシャンらはアンダーグラウンド・シーンから登場した。このシーンは既存のポップス文化を拒んだところに成立していた。旧体制であるGSに反抗した音楽と、反戦フォークと呼ばれた反体制的な歌詞は大学生らに受け入れられた。英米の新しいロックの精神性と思想性が、日本ではフォークというかたちで消化し、受け入れられたのだ。だがこの時代のアンダーグラウンドな音楽は、精神面では英米のロックを受け入れたものではあったが、音楽的にはロックではなくあくまでもフォークであった。この時代のロックとはあくまで英米の、英語詩のものであったのだ。しかし、ロックは英語詩であるというこの時代のロックのアイデンティティーは、1970年にデビューした「はっぴいえんど」によって揺さぶられることになる。

「はっぴいえんど」は細野晴臣、大滝詠一、松本隆、鈴木茂の四人からなるバンドで、今もなお日本のロックに強い影響力をもち続けている。彼らのデビューした1970年ごろのロックは英米から入ってくる音楽であり、英語詩のものであった。そのため日本人がロックをやるためには英米ロックの曲をカバーするか、または英語詩でオリジナル曲を作るかのどちらかであった。そんな中、彼らはデビューアルバム『はっぴいえんど』で全曲オリジナル曲に日本語の歌詩をつけたいわゆる「日本語ロック」を発表したのである。『はっぴいえんど』の評価をめぐって「日本語ロック論争」などと呼ばれる論争が起こったが、この論争の決着はそれほど重要ではない。「はっぴいえんど」は英米のものであったロックを日本人として受け入れ、解釈することによって、それまで英米の模倣でしかなかった日本のロックの可能性をひろげたのであった。

「はっぴいえんど」は1973年に解散したが、彼らの流れから多くの個性豊かなアーティストが生まれている。たとえば荒井由美、山下達郎、吉田美奈子、あがた森魚、矢野顕子、「ムーンライダーズ」などがそれにあたり、彼らはロックを日本風に受け入れ、解釈す

ることで独自の世界を構築していった。またこの時期、ロックの大衆化に大きな役割を果たした「キャロル」の登場も手伝って、ロックは次第にビジネス的な裏づけを与えられるようになる。この中で日本のロックは多様化し、ポップスに近いものに変化していった。英米と同義のロックが存在しなかった日本の音楽界でロックが生き残るためにはポップスに接近し、ポップス全体を変えていくしかなかったのであった。そして、ポップスに接近した日本のロックはポップスとして認知されるにつれ、「ニュー・ミュージック」と呼ばれるようになった。

1970年代前半に始まったニュー・ミュージックは、それまでの体制化してしまった歌謡曲やGSに対する反動として生まれたフォークや、新しいロックを母体としたものであった。しかしニュー・ミュージックという言葉が定着する1970年代後半になると、フォークやロックの精神性を欠いた歌手がニュー・ミュージック界に姿をあらわし、人気を得るようになった。こうしてロックとは似て非なるニュー・ミュージックがポップス界を闊歩する頃になると、それに対抗する文化として、今度は「テクノ・ポップ」や「パンク」、「ニューウェイブ」が誕生したのであった。

テクノ・ポップの始まりは「YMO（イエロー・マジック・オーケストラ）」のデビュー盤が発売された1978年11月である。「YMO」は坂本龍一、細野晴臣、高橋幸宏の三人によるバンドで、コンピューターを利用した彼らの音楽は当時、まさに画期的なものであった。翌年の欧米ツアーを機に人気が発し、以後「YMO」は1983年の解散まで日本のロック、ポップス界をリードしつづけた。テクノ・ポップは最新の楽器テクノロジーと密接に繋がっていたこともあって1980年代前半に活躍したほとんどのアーティストがテクノ・ポップの影響を受けたが、1982年に「イモ欽トリオ」に代表される「テクノ歌謡」がポップス界で流行するようになってから、テクノ・ポップはもはや「新しい潮流」とはいえなくなってしまった。

そしてこのころ生まれたもうひとつの新しい流れがパンク、ニューウェイブであり、「SKEN」、「フリクション」がその代表的なバンドであった。彼らは「東京ロッカーズ」と名乗り、ロンドンやニューヨークで生まれたパンクを意識しながら、体系化したロックやニュー・ミュージックに対抗した斬新で攻撃的な音を求めて、小さなホールやライブハウスでの活動を積極的におこなった。テクノ・ポップとパンク、ニューウェイブというふたつの大きな流れが1978年から1982年の日本のロックの特徴的な動きである。

1983年ごろになると、ヒットチャートには多くのロック系ミュージシャンが登場し、歌番組やCM、イベントなどもロックなしには成立しなくなっていた。日本にロックが定着し、大衆化したのである。そしてこのころからロック、ポップス、歌謡曲の間の境界線があいまいになってしまったのであった。

ロックが大衆化する一方で、それらの動きとは相反する動きが生まれたこともこの時期の特徴である。その動きの中心はパンク、ニューウェイブに影響を受けたバンドであった。彼らはヒットチャートにはほとんど無関心で、彼らにとって大衆化したロックはもはやロ

ックではなく、古い体制に組み込まれたポップスにすぎなかった。彼らは自らをアンダーグラウンドなシーンに置き、音楽的な技術よりもアンチ・ポピュラーの精神を重要視した。ハードコア・パンクと呼ばれる音楽がこの流れを象徴している。こうした流れからロック系のインディーズ・レーベルが多数登場し、そこで活躍するアーティストは「インディーズ」と総称され、インディーズは一種のブームとなった。そしてインディーズが若者に支持されていることに大手レコード会社やマスコミが目をつけたのが、バンドブームの始まりであった。

インディーズの流行によってバンドがより身近なものとなり、アマチュアバンドを組む若者が増えた。増えつづけるアマチュアバンドの数に対して、ライブハウスの数は圧倒的に少なかった。それでも人前で演奏したかったアマチュアバンドは東京原宿の歩行者天国、通称「ホコ天」で演奏を始め、1980年代の終わりにはホコ天がストリートライブのメッカとなったのであった。こうして起こったバンドブームに拍車をかけたのが1989年2月からTBS系で放映された「平成名物TVイカすバンド天国」、通称「イカ天」であった（兼田、2004）。イカ天はアマチュアバンドのコンテスト番組であったが、この番組が刺激となってバンドの数はますます増えていく。ホコ天、イカ天から登場した代表的なバンドは「THE BOOM」、「KUSUKUSU」、「ジッタリン・ジン」、「フライング・キッズ」、「たま」、「ブランキー・ジェット・シティー」などである。増えつづけるバンドの中で他のバンドより少しでも目立とうと、イカ天のミュージシャンの多くは衣装、メイク、パフォーマンスにおける過剰ともいえるほどの自己演出にはしった。しかし、一部を除いて音楽的には新しいものが見られなかったこともこのバンドブームから生まれたバンドの特徴である。マスコミがあおったブームは1990年ごろには終わってしまうが、バンドブームはあくまでもバンドのブームであって、ロックのブームではなかった。

ここまで、日本のロックの発展について述べてきたが、様々に変化してきたロックに共通していることがある。日本のロックは常にポップス、歌謡曲界を意識して新しい音楽を作り出してきた。既存のポップスに反抗して新たな音楽を作り出すことによってポップス界を変えること、それが日本のロックに共通している姿勢である。それゆえロックには常に反体制的、反社会的なイメージがつきまとうのだ。

第二節 ポップス

日本の大衆音楽はおおざっぱに「ポップス」と呼ばれ、ロックもここに含まれることが多い。ではポップスとはどのような音楽ジャンルなのだろうか。

1 ポップスとは何か

「ポップス」という言葉は誰もが知っており、言葉の意味もなんとなく知っている。ポ

ップスとは文字通りポピュラーミュージックであり、「大衆音楽」や「流行音楽」のことである。一般大衆の支持を得ている音楽がポップスなのである。大衆の支持を得るための、売れることを目的と

した音楽といったほうがわかりやすいかもしれない。大衆に支持されるということはわかりやすいということである。わかりにくい音楽は大衆に支持されない。必然的に多くの人々が共感できる恋愛をテーマとした歌詞が多くなる。わかりやすい音楽という以外にポップスを規定するものはない。リズムだけをみても8ビート、16ビート、最近では4ビート、スカのような裏打ち※までポップスにはさまざまなものが含まれる。ポップスにはおそらく定型がないとおもわれるほどに多種多様な音やリズムがもちいられている。ポップスを分類概念としてみた場合、それは「万人に受け入れられる」ということ、すなわち消費形態を基準としており、たとえば「ロック」のように音楽形式や精神性に基づく分類概念とは根本的に異なっている。

2 日本のポップスの発展

ここで日本のポップスの発展をみていくことにする。日本でポップスという言葉が使われ始めたのはそれほど昔ではない。戦後すぐから1955年くらいまでは、外国から入ってくるポピュラーミュージックはすべて「ジャズ」と呼ばれていた。またロカビリーやロックンロールの生演奏をするところは「ジャズ喫茶」と呼ばれていた（みつとみ、1999）。この「ジャズ喫茶」とは現在のライブハウスとほぼ同じである。ここでいう「ジャズ」とは現在では洋楽と呼ばれるものであり、現在一般的にいうジャズとはまったく違う意味である。とはいえ戦後すぐ、つまり1945年頃のアメ리카ではチャーリー・パーカーやディジー・ガレスピーらを中心とした「ビバップ」と呼ばれるモダンジャズがもっとも新しくポピュラーな音楽であったために、この「ジャズ＝外国のポピュラーミュージック」という図式は完全に間違ったものではなかったといえるだろう。

日本の音楽文化においては戦前、戦後では発展のしかたが異なる。戦前の音楽はヨーロッパを模範としたものであった。大正時代の流行歌、オペラなどはすべてヨーロッパを模範としたものである。それに対して第二次世界大戦敗戦後、アメリカ軍が日本に駐留するようになってからの日本の音楽文化はアメリカの影響を強く受けるようになった。米軍基地から発信される音楽、つまりジャズ、ロカビリー、ロックンロールが日本のポップスの発展の土壌となったのである。戦後すぐに登場した日本のポップス界の大スターである美空ひばりは、現在では演歌歌手というイメージが強いようだ。しかし彼女はもともとジャズ歌手であり、ブルースを歌っていた。ジャズトランペッターとして世界的に有名な日野皓正は「彼女の存在そのものがブルースだった」と述べている。戦後すぐの日本ポップス界のスターの役割は、戦後の日本の経済や社会を立て直すためのエネルギーを人々に与えることであり、彼女は見事にそれをやってのける。この時代のレコード会社に課せられた

※ 裏打ちとはオフビートのことである。たとえば4拍子においての第2拍と第4拍を日本では「裏」と呼び、「裏」にアクセントを置くことを「裏打ち」という。

使命は営利の迫及よりも、音楽文化の創造や音楽を通じて社会に貢献するというものであった。

しかし1960年代に入り、テレビが普及するようになったころから、日本の音楽産業が変わり始める。コロンビアレコード、ポリグラムなどの海外の巨大なレコード会社が日本に進出し、音楽が大きな利益を生み出すビジネスとしてとらえられるようになったのである。音楽産業が巨大化するとともに、アーティストのマネージメントは音楽事務所、作品の生産はレコード会社の仕事というように役割が分担されるようになる。役割が分担されることにより、それまでレコードの販売とアーティストのマネージメントの両方を専属的にこなっていたレコード会社はアーティストのマネージメントを音楽事務所にゆだねることになる。そうすることによりレコード会社は音楽作品の管理はできても、アーティストの管理はできなくなってしまったのである。要するにアーティストの生み出す利潤の半分以上をレコード会社は放棄してしまったことになる。ここで注目したいのは、アーティストの価値と、レコードの価値の違いについてである。作品や活動、キャリアによってアーティストの価値はいくらでも上げることができる。その価値に限界というものは存在しない。つまりは高く売ることができるということである。ある種神格化されたともいえる美空ひばりのような存在を考えればこのことは了解しやすい。しかしそのアーティストの作品であるレコードやCDは値段の決まったものであり、高く売ることはいできない。そのため、レコード会社がより多くの利益を得るためには、商品を数多く売るしかないのである。それによってレコード会社は作品をヒットさせること、ヒットする作品を作ることができるアーティストを探すことが第一の役割となり、音楽文化の創造や音楽を通じて社会に貢献するといった役割はただのたてまえとなってしまったのだ。

そして1970年代にもうひとつ、日本のポップスの方向性を変える出来事がおこった。カラオケブームの到来である。カラオケの誕生は1970年代初頭である。その頃のカラオケはBGMの再生機として使われていた小型のジュークボックスにマイクをつなぎ、伴奏テープを流しながら歌うというものであった。歌詞テロップのついた映像を見ながら歌う現在のカラオケとは違い、テープを伴奏に歌詞カードを見ながら歌うというのが普通であった。1970年代初めに誕生したカラオケは酒場を中心として人気を博し、1976年から1977年にかけてブームとなった。このカラオケブームによってカラオケが普及したために、カラオケで歌いやすい曲ほどヒットしやすいという現象が起こった。日本のポップスはごく簡単に説明すると、「A-Bーサビ」という形式でつくられている。つまりAというメロディがあり、次にBというメロディがきてサビと呼ばれるコーラスセクションに突入する、という形式である。このサビとは音楽的にもっとも盛り上がる部分であり、印象に残る部分でもある。サビの歌いやすい曲ほどカラオケで歌われやすく、ヒットしやすい。この現象が必然的に日本のポップスに影響する。歌いやすさとはなじみやすさであり、わかりやすさである。こうしてカラオケブームがひとつの原因となって日本のポップスは歌いやすくわかりやすいものを求めていくこととなったのである。

よりわかりやすく売れる音楽を求めていくこととなった日本のポップス界に、現在でもポップスの象徴的存在といえる「アイドル歌手」の時代が到来する。アイドル〔idol〕とは、崇拜、憧れの対象となるもののことである。1970年頃の日本のアイドル歌手には特に、虚構性の強い憧れの存在というイメージが強いようだ。「白雪姫」というイメージ戦略のもと国民的アイドルとなった天地真理、「お姫様

カット」で絶大な人気を誇った麻丘めぐみ、「王子様ルック」で登場した城みちるなどがその代表的な例である。またその後1980年代に入っても、山口百恵、松田聖子、近藤真彦などがスーパーアイドルとして絶大な人気を誇った。アイドル歌手たちには決して歌のうまさは求められず、それよりも見た目のよさや清純なイメージが重要視された。これらのアーティスト性の弱いアイドル歌手たちに楽曲を提供したのは、その頃シンガーソングライターとして活躍していた大滝詠一、松本隆、鈴木茂、松任谷正隆らであった。大滝詠一、松本隆、鈴木茂、そして細野晴臣らのバンドである「はっぴいえんど」、また細野晴臣、鈴木茂、松任谷正隆、矢野顕子らの「ティン・パン・アレー」は当時、日本語を使ったロックの先駆的存在であった。また彼らの音楽は当時、より新しいポップスを目指す音楽ジャンルとして「ニュー・ミュージック」と呼ばれていた。そのような彼らが楽曲を提供することにより、アイドル歌手のレコードは日本のポップス業界の思惑通りにヒットするとともに、ロックのポップス化ともいえる現象が進行することとなったのである。また、歌手としては短命で、入れ替わりが激しいこともアイドル歌手たちの特徴である。現在にも引き継がれているこの「アイドル歌手」は、「売ることを目的とした、わかりやすくなじみやすく大衆の支持を得るための音楽」という、日本のポップスを象徴する存在だといえるだろう。

3 ポップスを特徴づける「わかりやすさ」

音楽を享受する者にとって「ポップス」とは何かを考えると、「わかりやすさ」が重要なキーワードとなる。ポップスは「わかりやすい」音楽である。音楽を享受し、消費する大多数の人々にとって「クラシック」は「わかりにくい」からポップスではない。「ジャズ」も「わかりにくい」からポップスではない。しかし「ロック」の場合、「ポップス」との境界は非常にわかりづらい。現在、日本のポップスはJapanese popular music を略して「Jポップ」と呼ばれている。また、「ロック」はひとつの形式と精神性を備えた音楽ジャンルとして認識されている。それにもかかわらず、レコード店では「Jポップ／ロック」としてひとまとめにされている場合が多い。「ポップス」と「ロック」が同義ではないことは先に説明したとおりである。ではなぜ「ポップス」と「ロック」はひとまとめにされるのか。

おそらく「ポップス」は「流行音楽」であり、「ロック」は現在流行している音楽の形式を代表しているので、両者を同一視するという姿勢がこの背景にはある。しかし一方で多くの人は、「ポップス」と「ロック」は違うものだという認識を共有している。「ロック」と呼ばれる音楽の中には必ずしも「わかりやすさ」を志向していないものがあり、その場

日本の音楽シーンの年表（1950～2000）

1950年代

1952	15歳の美空ひばりが歌謡曲歌手史上初の歌舞伎座リサイタルで『りんご追分』『お祭りマンボ』を初演する。1949年のデビューからわずか数年で人気、実力ともに歌謡界の頂点に立つ。その後もジャズ、ロカビリー、演歌などあらゆるタイプの曲を歌い、1989年に亡くなるまで歌謡曲の女王と呼ばれた。
1953	ルイ・アームストロングが来日する。ジョージ川口らの「ビッグ・フォー」など日本のジャズバンドも人気を集め、ジャズブームが起こる。1952年からの米軍撤退で基地の仕事が減り、ジャズメンがジャズ喫茶やキャバレーに進出したことが背景にあった。
1955	三橋美智也の『ご機嫌さんよ達者かね』、春日八郎の『別れの一本杉』がヒットする。ふるさと歌謡、望郷歌が1950年代後半の歌謡曲の大潮流となる。その人気を支えたのは、工業化進展で離農して都市に大移動した若者たちであった。米軍基地やジャズ喫茶で活動していたカントリー＆ウェスタン・バンドである「ワゴン・マスタース」がレコードデビューする。
1956	ペレス・プラードが来日する。『マンボNo.5』が大ヒットし、歌謡曲に大きな影響を与える。
1957	ジャズ界出身のフランク永井が歌謡曲に転身する。『東京午前三時』『有楽町で逢いましょう』などがヒットし、都会調歌謡と呼ばれ、ふるさと歌謡、望郷歌と対で人気を呼び始める。
1958	「第一回日劇ウェスタン・カーニバル」が開催される。ウェスタン・バンド以上に、プレスリーに影響を受けた平尾昌章、山下敬二郎、ミッキー・カーティスがアイドル的人気を集め、ロカビリーがブームになる。
1959	本放送を開始したフジテレビの「ザ・ヒットパレード」などで、ロカビリー歌手による洋楽カバー曲が1960年代初頭まで人気となる。第一回レコード大賞が開催される。受賞曲は水原弘『黒い花びら』であった。

1960年代

1962	橋幸夫と吉永小百合のデュエット『いつでも夢を』がレコード大賞を受賞する。こうした健康的な青春歌謡が1960年代中ごろまで大流行する。
1963	坂本九『上を向いて歩こう』（1961年発表）が『スキヤキ』と改題され全米一位になる。
1965	エレキギター演奏で知られる「ベンチャーズ」が来日する。その影響からエレキブームが始まる。各地の教育委員会が非行の温床としてエレキ禁止令を出す。しかしフォークブームとともに、アマチュアミュージシャンに門戸を開いたことが、歌謡曲を大きく変えることになる。
1966	「ビートルズ」が来日し、社会的事件となる。その影響でエレキ・バンドが歌を歌い始め、GS（グループサウンズ）がブームになる。マイク真木『バラが咲いた』のヒットでカレッジ・フォークが一般的に認知される。
1967	映画俳優加山雄三の自作曲『君といつまでも』が大ヒットする。「スパイダース」、「タイガース」、「テンプターズ」などの人気でGSブームが頂点に達する。この年のレコード大賞は「ブルー・コメッツ」の『ブルー・シャトー』であった。

- 1968 このブームの影響でフリーの作词、作曲家が増える。「フォーク・クルセダーズ」の『帰って来たヨッパライ』、高石友也の『受験生ブルース』のヒットで関西フォークが注目される。日本のソニーと米コロムビアが合併して「CBSソニー」を設立する。以後1970年までレコード会社の合併ラッシュが続く。放送局やプロダクション系列の音楽出版社も相次いで誕生し、レコード会社がアーティストを専属させるという体制が崩れ始める。
- 1969 都はるみ、水前寺清子、森進一、青江三奈、藤圭子らの歌がエレキブーム以降のポップス系歌謡曲と区別して演歌と呼ばれ始める。アメリカで巨大ロック・フェスティバルである愛と平和の祭典「ウッドストック」が開催される。かつてない規模のロック・コンサートであったがこれといった騒動は起こらなかった。この大イベントの影響はイギリスにも日本にも波及したが、反体制を標榜し音楽と薬物に浸るだけという側面があったことも否定できない。日本では、「69」年は「ロック」の年として現在でも伝説として語り継がれている。「ウッドストック」の影響を受け日本でも「10円コンサート」や「第一回日本ロック・フェスティバル」が開催される。インディーズ・レーベルの草分けである「URCレコード」が誕生する。第一回発売は岡林信康の『私を断罪せよ』であった。
- 1970年代 カセットテープが世界的に普及する。1979年にはソニーが携帯用超小型カセットテープ再生機「ウォークマン」を発売した。
-
- 1971 アイドルブームが始まる。テレビの影響が強まり、歌手の低年齢化、ルックスやアクションを重視する傾向に拍車がかかる。同年、日本テレビのタレントスカウト番組「スター誕生」が開始される。この番組は1983年の終了までに山口百恵、「ピンクレディー」、中森明菜など多数の歌手を輩出する。「はっぴいえんど」と内田裕也の間で日本語と英語のロック論争が起こる。
- 1972 吉田拓郎の『結婚しようよ』『旅の宿』がヒットする。翌年以降も井上陽水『夢の中へ』、かぐや姫の『神田川』などが続き、フォーク系のシンガーソングライターの大ブームが始まる。
- 1975 「加藤和彦とサディスティック・ミカ・バンド」がイギリスツアーをおこなう。「キャロル」が解散し、矢沢永吉がソロ活動をはじめ。 「ダウン・タウン・ブギウギ・バンド」の人气が頂点に達する。関西では上田正樹らのブルース、R&Bバンドが活躍した。小室等、吉田拓郎、井上陽水、泉谷しげるが「フォーライフ・レコード」というレーベルを設立する。アーティストによるインディーズ・レーベルのはしりであった。この年には荒井由美の『ルージュの伝言』がヒットする。フォーク、ロック系の音楽がレコード売上げの過半数を占め、ニュー・ミュージックと呼ばれ始める。
- 1977 歌謡曲とニュー・ミュージック系のソングライターとの交流が進み、沢田研二、山口百恵、「キャンディーズ」、「ピンクレディー」などが活躍する。「ツイスト」、矢沢永吉、「サザン・オールスターズ」などによるロック系の楽曲もヒットするようになる。
- 1978 パンク、ニューウェイブ系の「フリクション」、「S-KEN」など5バンドが「東京ロッカーズ」と名乗って公演をおこなう。インディーズのレーベルである「ゴジラ・レコード」が誕生する。
- 1979 コンピューターを使った「YMO」の音楽の人气が爆発し、欧米ツアーに出発。テクノ・ポップのブームが始まる。

1980年代 音響機材や技術、ソフトがアナログからデジタルに激変する。各種のデジタル・オーディオ・ディスクおよびビデオ・ディスクが登場した。1982年、日本でCD（コンパクト・ディスク）が世界に発表される。

-
- | | |
|------|--|
| 1980 | 貸しレコード店が東京で誕生する。人気拡大につれレコード協会と対立することとなる。1984年以降は貸し出し禁止期間の設定などで和解の方向へと向かった。 |
| 1981 | 1980年に山口百恵が引退した後、松田聖子がアイドル人気ナンバーワンとなる。彼女をはじめ、田原俊彦、近藤真彦、中森明菜、小泉今日子らの楽曲が1980年代前半のヒットチャートを席巻する。これらのアイドルたちに作品を提供したのは1970年代に登場したニュー・ミュージック系のアーティストたちであった。 |
| 1982 | 装置に凝った荒井由美のライブ、「RCサクセション」の横浜スタジアム公演など、ロック系コンサートの大型化やショウ・アップが目立つようになる。 |
| 1983 | 尾崎豊がデビューする。1992年に亡くなってからカリスマ的な人気を博す。 |
| 1985 | 限りなく素人に近いアイドル集団、「おニャン子クラブ」がテレビ番組で人気を集めるが、アイドルの短命化も加速する。 |
| 1986 | 東京原宿の歩行者天国、通称「ホコ天」がデビュー前のバンドの顔見せの場として注目を集める。インディーズも増加の一途をたどる。メジャーでは1980年代後半に「レベッカ」、「BOØWY」、「ユニコーン」、「ザ・ブルーハーツ」、「プリンセス・プリンセス」、「フリッパーズ・ギター」などのバンドが次々と人気者になる。 |
| 1989 | 数年来のバンドブームがテレビのバンド・コンテスト番組「イカすバンド天国」で世間に認知される。「たま」、「ブランキー・ジェット・シティー」など数多くのグループがデビューしたが、マスコミのあおったブームは短命に終わる。一方、「X（のちの「X JAPAN」）」がメジャーデビューし、ビジュアル系のバンドに道を開く。 |

1990年代 1992年、MD（ミニ・ディスク）が発売され、まもなく録音メディアの主役になった。1996年、DVD（デジタル・ビデオ・ディスク）が登場する。また1999年にはソニーなどがインターネットを通じた音楽配信を開始した。

-
- | | |
|------|--|
| 1991 | この年から、カラオケボックス、シングルCDの普及、テレビ・タイアップと連動して「CHAGE & ASKA」、「B'z」などのアーティストによるメガ・ヒットが続出する。 |
| 1992 | 「ボアダムス」、「少年ナイフ」などが海外でメジャーデビューする。以後、テクノのケン・イシイ、「DJクラッシュ」など海外で評価されるアーティストが増える。 |
| 1994 | 「ピチカートファイブ」、小沢健二、「コーネリアス」などミクスチャー度の高いポップ・ミュージックが渋谷系と呼ばれる。 |
| 1996 | 安室奈美恵、華原朋美、「globe」などのプロデュースで小室哲哉がダンスミュージック的な音楽を定着させる。1990年代中期には他に、「ミスターチルドレン」を小林武史が、「GLAY」を佐久間正英 |

が、「PUFFY」を奥田民生がプロデュースするなど、アーティストでもあるプロデューサーの活躍が続く。

1998 「Misia」、「Sugar Soul」らR&Bの影響を受けた女性歌手が活躍する。その中で宇多田ヒカルのデビューアルバム「First Love」（1999年）が売上げ枚数700万枚を超え、日本のレコード売上げ史上最多記録になる。

（この年表は『クロニクル 20世紀のポピュラー音楽』（三井他編、2000）をもとに作成した）

第二章 ロックとポップスの分類

ここでは、様々な人に対する聞き取り調査から、音楽ジャンルとしての「ロック」と「ポップス」に対する認識のあり方に関する事例を提供したい。まず、売り手であるレコード店におけるジャンル分けを検討した後、個々のリスナーたちの認識を検討する。

第一節 レコード店でのジャンルの分け方

私たちが一番身近で音楽ジャンルに接するところはレコード店である。ほとんどすべてのレコード店はジャンルごとにレコードを分けて置いている。そして私たちは自分のほしいレコードのジャンルのコーナーへ行き、レコードを探すのである。数え切れないほどの音楽とそのジャンルが存在する中、レコード店ではどのように商品をジャンル分けしているのだろうか。

富山市内に店をかまえる、あるレコード店の店員に対する聞き取りによると、レコード店でのジャンル分けにおいてはこれといった決まりはなく、客が買いやすいように分けることが第一の目的となるそうだ。客が探しやすい、多くの人が見そうなコーナーにレコードを置く。そのため、同じレコードを複数のコーナーに置くこともあるそうだ。そして、レコード店によってジャンルの分けかたも違うため、同じレコードがレコード店によっては別のジャンルのコーナーに置かれていることもよくあることである。置くべきコーナーはレコードを注文する時点でわかるものがほとんどだという。前もって注文先や雑誌などからそのレコードに関する情報を仕入れ、その情報を元に実際にはレコードを聴くことなくジャンル分けするのである。情報から判断できない場合には、実際にレコードを聴いて判断することもあるそうだ。注文するレコードの量が多く、すべてを聴いて判断することができないためこのようなやりかたになるという。

日本のレコード店では「Jポップ／ロック」とふたつのジャンルがひとまとめにされているという現状について質問したところ、ややこしいから仕方のないことだという答えが返ってきた。確かに「ポップス」は売れるための、「『聴いてくれ』という」音楽で、「ロック」とは本質的に違うということはこの店員自身は認めていた。しかし「ポップス」と「ロック」を分けることは、分けるほうとしても難しく、また買うほうにとってもややこしくなるだけだということであった。

新しいジャンルとはどういうときに生まれるものかという質問に対しては、それまで聴いたことのない音楽が生まれたときにほかと区別するために新たなジャンルが生まれるのではないかという答えであった。確かにその通りである、しかし、あるアーティストを売り出すためにレコード会社が戦略的に新たなジャンルを作り出しているということもあるのではないかと重ねてたずねたところ、売り文句的に新しいジャンル名が生まれることは確かにあるが、そうして生まれたジャンルで実際に残っていくものはごくまれであると

いうことであった。

レコード店におけるジャンル分けが、客にとっての探しやすさを第一の目的としていることは当然のことである。しかし探しやすさを求めて「Jポップ／ロック」とふたつのジャンルをひとくくりにすることによって、「ポップス」と「ロック」の境目がよりあいまいなわかりにくいものとなっているのもまた事実であろう。また、ジャンルを分ける物差しが個々のレコード店にゆだねられていることも音楽のジャンルの境界をあいまいなものにしているひとつの原因となっているだろう。

第二節 リスナーによるジャンルの分け方

音楽の買い手となるリスナーはどのように音楽のジャンル分けを受け止め、ポップスとロックの区別を意識しているのだろうか。Kさん（23歳、男性、ロックとジャズを好むリスナー）の場合

Kさんは二週間に一回はレコード店に足を運び、一度に二、三枚はCDやレコードを購入するほどの音楽好きだ。高校生の時にはロックギターを経験し、現在はジャズペースを弾いている。「ロック」とは「一緒に飯を食う」が、「ポップス」とは「一緒に食わない」というこだわりをもつ彼は「ポップス」が大嫌いだそうだ。

「ジャンルについては誰が分けているのか知りたい。雑誌やレコード店が便宜的に分けているだけではないか」というのがKさんの音楽のジャンル分けに対する考えである。音楽ジャンルを便宜的に分けることには確かに利点がある。たとえばジャンルがまったくなされていないレコード店があったとする。その店ではあいうえお順またはABC順に並べられたアーティスト名を頼りに、探しているレコードを見つけるわけである。あ行のコーナーには膨大な量のCDが並び、CDの背に書いてある小さな字を見て求めているCDを見つける。これではを見つけるのに時間がかかるうえ、眼も疲れる。確かに便宜的なジャンル分けは必要であるといえる。しかし便宜的とはいえないような細かいジャンルが数多く存在することも事実である。それに関して彼は「大きく分けられたジャンルを聴きこんでいる人にとって、細かく分けられたジャンルはありがたい」といった。自分の好みがある程度絞られた状況で、自分の好みの音楽を探すには細かく分けられたジャンルが必要だというわけである。たとえば、初めてジャズを聴く場合には、レコード店に行って「ジャズ」のコーナーを見て適当なレコードを探す。そしてある程度ジャズを聴きこんで、自分がジャズの中でもたとえば特に「ビバップ」が好きだと知ると、音楽雑誌などでビバップのレコードに関する情報を集めるわけである。確かにこういう視点からみれば、細かいジャンル分けも便宜的といえる。

彼にとって「ロック」と「ポップス」はまったく別の音楽であるという。「ロック」はカッコいい音楽で、「ポップス」はダサい音楽だというのが彼の「ロック」と「ポップス」を分ける際の判断基準であるようだ。「ポップス」は一時的な流行にあわせた音楽で、貫いているものがなく、彼にはその点がダサく聞こえるのだそうだ。しかし「ポップス」の中で山口百恵、「ピチカートファイブ」、「UA」、「オ

リジナル・ラヴ」、「クレイジーケンバンド」は例外的にかっこいいという。それらのアーティストたちをKさんは「ポップス」とは呼ばず、「ポップ」と呼んでいた。Kさんが「ポップ」と呼ぶアーティストたちは音楽形式的にはロックとはいえないが、「ポップス」に分類されるアーティストの中でも個性のある楽曲を作り、個性をつらぬこうとする姿勢が見られる。この姿勢をKさんはかっこいいと思い、音楽形式からは「ロック」に分類することができないが、他の「ポップス」とは区別して「ポップ」と呼んでいるのである。

以下に、Kさんによる「ポップス」と「ロック」の分類をアーティストごとに示す。以下に示されるアーティストについては巻末にリストを付した。

「ポップス」

アイドル系のミュージシャン、浜崎あゆみ、宇多田ヒカル、平井堅、「aiko」、「Misia」、

「ゆず」、「ウルフルズ」、「ミスターチルドレン」、「スピッツ」、「ジュディ・アンド・

マリー」、尾崎豊、「バンブ・オブ・チキン」、「X JAPAN」、「GLAY」、「B'z」、森山

直太朗、「19」、「175R」、「ロード・オブ・メジャー」、「ユニコーン」、「ビギン」、

「ハイ・スタンダード」、山崎まさよし、「サザン・オールスターズ」

「ロック」

「くるり」、「スーパーカー」、高倉健、遠藤賢司、井上陽水、「スーパーバタードッ

グ」、「はっぴいえんど」、「ゆらゆら帝国」、「RCサクセション」、「少年ナイフ」、「レ

ディオヘッド」、ボブ・ディラン、ジミ・ヘンドリクス、「レッド・ツェッペリン」、

「ドアーズ」

「ロック」と「ポップス」は全く違う音楽だといっていたKさんだが、具体的なアーティストの名前を「ロック」と「ポップス」に分類してもらっていく中で、「ロック」と「ポップス」の中間にあるというアーティストがいくつか挙がった。そのアーティストは「イエローモンキー」、「ミッシェル・ガン・エレファント」、「ブランキー・ジェット・シティー」、「ザ・ハイロウズ」である。これらのアーティストのCDをKさんはあまり聴いたことがないということでイメージだけではどちらにも分類しがたいというのが理由であった。しかし、Kさんは「イエローモンキー」について興味深い話をしていた。「昔は『イエローモンキー』を『ポップス』だと思っていたが、最近は『ロック』なのではないかと思い始めた」というのだ。その理由は最近耳にした「イエローモンキー」の『JAM』という曲の

中に「外国で飛行機が落ちました／ニュースキャスターは嬉しそうに／乗客に日本人はいませんでした／僕は何を思えばいいんだろう／僕は何て言えばいいんだろう」という歌詞があったことであるという。ここに、Kさんによる「ロック」の分類基準において重要なポイントがある。Kさんにとっての「ロック」には音楽形式、歌詞、アーティストの姿勢においての「ハッ」とさせられる新しさ、かっこよさが必要なのである。高倉健、井上陽水という音楽形式的にはロックとはいえないアーティストをKさんが「ロック」に分類しているのも、高倉健や井上陽水を聴いている自分がかっこいいと思うからであるという。「くるり」、「スーパーカー」らは「日本のポスト・ロック」といわれ、彼らの作り出す楽曲には音楽形式的な新しさがある（岡村、2004）。また彼らの歌詞には独特の世界観がある。彼らの音楽形式的な新しさ、歌詞における世界観を認めて、Kさんは「ロック」に分類しているのである。このように音楽形式における新しさ、個性を主張する歌詞、アーティストの姿勢をかっこいいと認めたものがKさんにとっての「ロック」なのである。Tさん（22歳、男性、ロックとジャズを好むリスナー）の場合

Tさんは二、三ヶ月に一回程度レコード屋に行き、その際にたいていの場合はCDを購入するという。Tさんはあまりジャンルにはこだわらず、どんなジャンルの音楽でも聴くようにしているという。

Tさんにとって、音楽ジャンルとは似た感じの音楽の区分けであり、売り手と聴き手がわかりやすく整理しやすくするためにマスコミやレコード店によって分けられたものだという。本人はあまりジャンルを意識することはないそうだが、CDを探したり、自分の音楽の好みを伝えたりするときには便利なものであるようだ。ジャンルを意識しないという彼にとっても、「ポップス」と「ロック」はやはり違うものだと認識されている。彼にとって「ポップス」はテレビに出てくる人たちがやる音楽で、あまりかっこいいとは思えない音楽であるという。また「ロック」とは彼が「ロック」だと感じるバンドであり、若者の青春であり、かっこいいと思う音楽であるという。しかし彼にとって「ロック」と「ポップス」の境界は非常にあいまいである。そのあいまいな境界に位置する音楽を彼は「『ロック』であり『ポップ』である」ものと表現した。Tさんも「ポップ」という言葉を使っているが、後述するようにKさんのいう「ポップ」とはニュアンスが異なる。彼には具体的にアーティスト名を「ポップス」、「ロック」、「『ロック』であり『ポップ』であるもの」の三種類に分類してもらった。

「ポップス」

「モーニング娘。」、「KinKi Kids」、「TOKIO」、その他のアイドル、「GLAY」、「B'z」、

平井堅、

「aiko」、「サザン・オールスターズ」

「ロック」

ジミ・ヘンドリクス、「メタリカ」、オジー・オズボーン、「UA」、「ミッシェル・ガ

ン・エレファント」、「ザ・ハイロウズ」、「ザ・ブルーハーツ」、「ブランキー・ジュ

ット・シティー」、「エゴ・ラッピン」、「X JAPAN」、尾崎豊、「バンプ・オブ・チキ

ン」、「ウルフルズ」

「ロック」であり「ポップ」であるもの

「くるり」、「スーパーカー」、斉藤和義、「ミスターチルドレン」、「アジアン・カン

フー・ジェネレーション」、「ジュディ・アンド・マリー」、「スピッツ」以上がTさんによる分類である。彼のいう、『『ロック』であり『ポップ』であるもの』はどちらかというところ「ロック」に分類されるものであるという。先に紹介したKさんと同様に、Tさんも「ポップ」という言葉を使っているが、Kさんのいう「ポップ」とTさんのいう「ポップ」とは少し違った意味をもっているようだ。Kさんは「自身がかっこいいと思うポップス」を、他のポップスとは区別して「ポップ」と呼んでいた。Tさんの場合は激しい音や、わかりにくい歌詞をもつ音楽を「ロック」とし、それに比べて聴きやすい音で、共感できるような歌詞をもち、音楽形式的にロックに属すると思われる音楽を「ロックでありポップであるもの」と分類している。つまりTさんのいう「ポップ」とは「なじみやすさ」や「聴きやすさ」のことである。

ではTさんの「ロック」と「ポップス」の分類基準はどこにあるのだろうか。Tさんのいう『『ロック』であり『ポップ』であるもの』とは、なじみやすく、聴きやすい「ロック」のことなので、ここでは「ロック」として考えることにする。Tさんにとって「ロック」と「ポップス」を分けるものは商業主義的であるか否かであるように思われる、Tさんが「ポップス」に分類したアーティストたちは皆、CDを出せば必ずヒットチャートの上位にランクインする。それに対して「ロック」に分類されたアーティストたちは「ミスターチルドレン」と「スピッツ」を除いて、曲によってはヒットすることもあるが、そうでないことも多い。Tさんにとっての「ポップス」とはCDを出せば売れるアーティストであり、そういった意味でも商業主義的といえるアーティストたちなのである。また彼にとっての「ロック」とは商業主義にはのらずに、新しいことに挑戦しているアーティストたちのつくる音楽であるということができる。Mさん（21歳、男性、ロックを好むリスナー）の場合

Mさんは二ヶ月に一回程度レコード屋に行き、年間でおおよそ五枚ほどのCDを購入するという。自分にとっての「ロック」とは何なのかを追及していきたいというMさんは「ロック」が大好きだそうだ。

Mさんの場合、中学生のころの彼にとって音楽にジャンルはなかったのだそうだ。そのころは自分でCDを買うこともなかったのでジャンルに関する知識がなかったということが理由である。彼が現在も大好きだというバンド、「ミッシェル・ガン・エレファント [Thee Michelle Gun Elephant]」もはじめて聴いたときにはロックだとは知らなかったそうだ「ミッシェル・ガン・エレファント」とは、ボーカルのチバユウスケ、ギターのアベフトシ、ベースのウエノコウジ、ドラムのクハラカズユキの4人から

なる、爆音でブルーズ・ロックを演奏するバンドである。1996年にメジャーデビューし、2003年に解散した。最後のステージとなる幕張メッセ公演では4万人近くを動員した。ジャンルを知らなかったころは「ミッシェル・ガン・エレファント」も、現在Mさんが「ポップス」に分類している平井堅も同じように聴いていたという。平井堅とは2000年にシングル「楽園」でブレイクした人気R&B歌手である。Mさんは音楽を聴いていくうちに、好きになる曲の多くが「ロック」と呼ばれていることを知り、ジャンルの存在を知ったという。

彼にとって「ロック」とは歌詞がわかりにくく、やさぐれているものであるという。彼のいう「やさぐれている」とは「どうしてもよさ、反社会的」の意味であるようだ。また「ロック」とはバンドによる音楽であり、「ロック」と呼ばれるためにはそのバンドにしか出せない音というものが存在し、またバンドメンバーの名前がはっきりとわかるものでなければならないという。それに対して「ポップス」とは歌詞がわかりやすく、健康的で、誰が何の楽器をやっているのかがわからない音楽だという。しかし「ロック」と「ポップス」の違いをはっきりと認識している彼にとっても、「ロック」と「ポップス」の間に存在する音楽があるようだ。Mさんによる分類は以下のとおりである。

「ポップス」

「スマップ」、「モーニング娘。」、「TOKIO」などのアイドルたち、平井堅、「U

A」、「aiko」

「ロック」

「ミッシェル・ガン・エレファント」、「ブラフマン」、「ブランキー・ジェット・シティ

ー」、「ザ・ブルーハーツ」、「ザ・ハイロウズ」、「くるり」、「アジアン・カンフー・

ジェネレーション」、「ドアーズ」、「ローリングストーンズ」、「レッド・ツェッペリ

ン」

「ロック」寄りの「ポップス」

「ロード・オブ・メジャー」、「175R」、「GLAY」、「ミスターチルドレン」、「バ

ンプ・オブ・チキン」、「ウルフルズ」

以上がMさんによる分類である。彼があげた中で「ロック」に分類されるものには嫌い

なものはなく、嫌いなものは「ロック」ではないようだ。また「ロック」寄りの『ポップス』とはバンドによる音楽であり、メンバーもはっきりわかっているが、わかりやすく、反社会的でないためど

ちらかといえば「ポップス」に分類されるものであるという。Mさんにとっての「ロック」の分類基準はどこにあるのだろうか。

アーティストの活動の方向性に注目してみると、Mさんが「ポップス」に分類したアーティストたちには「売りたい」「多くの人に聴いてもらいたい」という意識があるように思われる。また、「ロック」に分類されたアーティストたちには売れる、売れないは別として、自分たちのやりたい音楽を追求している姿勢がみられる。Mさんは音楽を分類する際、まずポピュラーミュージックの中から「売りたい」「多くの人に聴いてもらいたい」という姿勢が感じられるアーティストを「ポップス」と分類し、残ったものの中から彼が「やさぐれている」と感じられるものを「ロック」として分類しているのだろう。また、音楽形式的にロックを取り入れているアーティストを「ロック寄りの」「ポップス」と分類していることからわかるように、音楽形式としてのロックもMさんにとっては重要な分類基準となっていることがわかる。Wさん（19歳、女性、ヒップホップとポップスを好むリスナー）の場合

Wさんにとっての音楽ジャンルとは、音楽の好みによって個性を主張するためのものであるという。また彼女は、好きなジャンルによってその人がどんな人であるかをおおよそ知ることができるのだという。たとえば「クラシック好きの人はいいところの子」や「パンク好きは活発な子」というように。これはもちろん目安でしかないのだが、確かにパンクロックには暴力や破壊というイメージが色濃く現れている。一見おとなしそうな人がパンクロック好きだと知ると、「お、なんだそうなのか。ちょっとこっち来て話そうよ」という状況になることを私自身も経験したことがある。各音楽ジャンルにはそれぞれイメージが存在する。クラシックは上品、ジャズはシブい、ロックは激しいといったイメージが一般的であるようだ。また「ポップス」には、幅広い音楽形式が含まれることによるものか、これといったイメージがないのが特徴である。好きな音楽ジャンルのイメージを、音楽の聴き手の性格の反映としてとらえてしまうということが実際にあるのだ。

Wさんにとっての「ロック」と「ポップス」の違いをたずねた。ロックミュージシャンには男性が多く、音楽そのものもテンポが速く、激しいイメージがある。「ポップス」にはアーティストが男女ともにおり、テンポは特に決まっていない。というのが彼女にとっての「ロック」と「ポップス」の違いであるという。また、「ポップス」のCDのジャケットにはアーティスト自身の写真が載っているものが多く、「ロック」のそれには絵が多いというのも「ロック」と「ポップス」の違いであるという、「ロック」をあまり聴かないので、「ロック」が何かはわからないというWさんにも、「ポップス」のイメージよりも「ロック」のイメージのほうがよりはっきりと認識されているようである。Wさんによる分類は以下

の通りである。

「ポップス」

「Kinki Kids」、「モーニング娘。」、「スマップ」、「TOKIO」、その他のアイドル

たち、「aiko」、「chara」、「ミスターチルドレン」、「ウルフルズ」、平井堅、「くるり」、

「ジュディ・アンド・マリー」、「Misia」、「19」、「ゆず」、森山直太朗、「ZONE」

「ロック」

「GLAY」、「ブラフマン」、「ブランキー・ジェット・シティー」、「ザ・ブルーハーツ」、

「ザ・ハイロウズ」、矢沢永吉、「B'z」、「SUM41」

どちらかわからないもの

「175R」、「バンプ・オブ・チキン」、「FLOW」、「ロード・オブ・メジャー」

Wさんにとっての「どちらかわからないもの」とは、最近新しく登場したアーティストたちで、「ポップス」でもなく、かといって「ロック」でもないと思われるもののことであるという。しかし、「175R」、「バンプ・オブ・チキン」、「ロード・オブ・メジャー」など、音楽形式としてはロックといえるアーティストがこの中に含まれている。このことから、Wさんのもつ音楽形式としてのロックの概念があいまいであることがわかる。ではWさんは何を基準に「ロック」を他から区別しているのだろうか。

Wさんによる「ロック」の分類基準は、音楽形式や精神性ではなく、「男性」「激しい」といったアーティストのイメージによるものだ。それゆえ、新しく登場したアーティストにはまだ特定のイメージがないため、「ロック」なのか「ポップス」なのかかわからないという状況におちいる。こういったイメージによる「ロック」の分類はロックファン以外の人たちにとっては特に珍しいことではないだろう。そしてそれらのイメージとは音楽を聴くことに拠るものよりも、テレビや雑誌を見ることによって植えつけられたものであるといえるだろう。

またWさんによる「ポップス」の分類基準は、売れていることや、テレビでよく見るアーティストであるということにあるといえるだろう。Nさん（19歳、女性、ジャズとクラシックを好むリスナー）の場合

Nさんにとっての音楽ジャンルとは音楽が発展していく中でできたものであるそう。また、各分野の音楽を深く掘り下げるためにつけられた、ただの名前であるという考えをもっている。音楽をジャンル分けすることによって、音楽性の近い人たちが集まることができ、それによってまた音楽そのものの性質が深くなるという。また、ジャンル分けによ

ってできた垣根によって、排他的になってしまうこともあるという。Nさんは「ロック」をほとんど聞いたことがないが、「8ビート、1Bビートの音楽」、「うるさい」、「ギターをもちいる」などのあいまいなイメージはあるという。また「ポップス」はほとんど聞いたことがなく、人気のある音楽という

以外にはイメージできない音楽だという。「ロック」と「ポップス」をほとんど聴かないというNさんにも具体的なアーティスト名をあげて、以下のように分類してもらった。

「ポップス」

アイドル全般、「aiko」、「スピッツ」、平井堅、「ゆず」、「Misia」、「175R」、「ミスターチルドレン」、「ZARD」

「ロック」

「X JAPAN」、「ジュディ・アンド・マリー」、矢沢永吉

どちらに分類してよいかわからないもの

「GLAY」

「ロック」、「ポップス」とともにあまり聴くことがないというNさんだが、テレビ番組によく出演しているアーティストには「ポップス」というイメージがともなうようだ。ただし「GLAY」のように「8ビート、16ビートの音楽」、「うるさい」、「ギターをもちいる」などのNさんの「ロック」に対するイメージを満たしているが、テレビ番組にもよく出演している場合は、どちらに分類してよいのか判断に困るアーティストとなるのである、Yさん（19歳、男性、ジャンルの好みのないリスナー）の場合

Yさんの場合はアーティストや音楽ジャンルによって音楽を聴くことはなく、曲ごとに聴く曲と聴かない曲があるという。彼がいいと感じる曲は「ポップス」に分類される曲が多いそうだ。彼にとっての音楽ジャンルとは音楽を説明するためのものであり、音楽に境界線を与えるためのものであるという。本来は音楽をわかりやすくするために設定された分類だが、各ジャンルに対する定義があいまいなためわかりにくくなっているというのが彼の考えだ。

Yさんは「ロック」と「ポップス」は同じものだという。「ポップス」とはその時代の流行歌であり、「ロック」は現在流行しているため「ポップス」に含まれるというのだ。そういう考えをもつ彼に、現在の「ポップス」にはどのようなジャンルが含まれるかをたずねた。軽いロック、バラード、ソウル、R&B、フォークなど幅広いジャンルの音楽が彼にとっての「ポップス」には含まれるそうだ。彼には、そのような「軽いロック」を含む、

彼が現在流行していると考えるものを「ポップス」、「軽くないロック」を「ロック」として分類してもらった。

「ポップス」

「モーニング娘。」、「スピッツ」、「aiko」、「ゆず」、森山直太朗、「ミスターチルドレ

ン」、「ZARD」、「19」、「オレンジ・ペコー」、「エゴ・ラッピン」、「DA PUMP」、「サ
ザン・オールスターズ」、「ソフィア」、尾崎豊、「ウルフルズ」、「Misia」、「UA」
「ロック」

矢沢永吉、「ザ・ハイロウズ」、「ザ・ブルーハーツ」、「175R」、「B'z」、「ジュディ・
アンド・マリー」、「バンプ・オブ・チキン」、「くるり」、「ブランキー・ジェット・シ
ティー」、「ミッシェル・ガン・エレファント」

Yさんは他のインフォーマントとは違い、「ポップス」とはポピュラーミュージックであると認識し
ている。そのためYさんにはたとえば「ロック」に対比される音楽ジャンルとしての「ポップス」に対
する明確なイメージがないのが特徴だ。またYさんの分類基準は主として音楽形式だけによるものであ
り、精神性や「わかりやすさ」を分類基準としてもちいないということも特徴である。私（23歳、男
性）の場合

私がはじめて意識して音楽を聴いたのは中学一年生のときであった。同学年の友達との音楽の話題に
ついていくために毎日のようにラジオやテレビからヒット曲の情報を集めた。そしてそれらの曲を覚え
てカラオケで歌っていた。そのころの私にとっての音楽は付き合いのためのものであり、音楽ジャンル
など意識したこともなかった。歌詞の意味についても考えることはなかった。

高校生になり、英語で歌う日本人のバンド、「ハイ・スタンダード」や「ケムリ」の存在を知り、そ
れらのバンドのCDを聴きあさった。音楽がかっこいいと初めて思ったのもそのころである。しかしそ
のころになっても「ハイ・スタンダード」は「ハイ・スタンダード」、「ケムリ」は「ケムリ」であり、
音楽のジャンルを意識することはなかった。そして、姉の友人が「U2」のCDを貸してくれたのが洋楽
を知ったきっかけであった。私はその姉の友人には会ったこともなく、顔も知らなかった。なぜ顔も
知らない人がCDを貸してくれたのかは今でもわからないが、私が「U2」を気に入った事を知り、その
人は自身のお気に入りの洋楽を集めたMDを作ってくれた。「グリーンデイ」を中心に「クーラシェイカ
ー」、「スマッシュマウス」などの曲がつめられたそのMDには、『グリーンデイ』はほんまに何言っ
てるかわかんけど、奴らめっちゃめっちゃロックです」と書かれた手紙が添えられて

いた。それを見た私は「この厳しい音楽がロックか」と初めてロックの音楽形式を意識するととも
に、洋楽に傾倒していった。そのころに「ビートルズ」や「オアシス」、「ミスタービッグ」、「エクスト
リーム」などの音楽を聴き、ロックはこういう音楽だという意識をもつようになった。現在の私は、
「ロック」とその他の音楽を分類する基準として歌詞の内容を強く意識している。しかしそのころ聴い
ていた音楽が洋楽や英語詩の楽曲が中心であったこともあり、歌詞の内容を意識することはまだ全く
なかった。

歌詞の内容を初めて意識したのは高校三年生のころ、尾崎豊の「卒業」を聴いたときであった。若者の社会に対する不満や将来の不安をストレートに歌った尾崎豊の歌詞は、当時の私にとって衝撃的であった。そして理由もなく「これはロックだ」と思ったのだった。

尾崎豊以降、私は歌詞の内容を強く意識するようになり、うまく言葉にできなかったことを代弁してくれるような歌詞、衝撃的な歌詞を書くアーティストを「ロック」だと感じるようになった。そして大学に入ってから「はっぴいえんど」の存在を知り、その歌詞とサウンドに衝撃を受けた。しゃれた文学性を漂わせた彼らの歌詞は独特の表現をもちいている。そして彼らの音楽を聴くと、なぜだかわからないが、ノスタルジーにも似た気分になり、夏の終わりや、砂埃の舞う道などの風景が心に浮かぶのだ。これは先に紹介したKさんも同様に感じる部分があるといい、私だけのことではないようだ。「はっぴいえんど」の存在は、私にとっては「ロック」である。また「はっぴいえんど」と同様に「くるり」も歌詞、サウンドの両面で私に衝撃を与えたバンドである。「くるり」の歌詞は、私が普段思っているけれどもうまく言葉にできない気持ちを見事に表現しているのである。そして、様々な形式の音楽からの影響を彼らなりの解釈でロックに取り入れたサウンドは私にとって、とても斬新なものに感じられる。「くるり」も私にとっての「ロック」の代表的存在である。

私の「ロック」の分類基準のひとつは歌詞の内容である。そしてもうひとつは音楽形式的な新しさである。「新しさ」とはロックに共通な音楽形式をもちいながらも斬新なアプローチを取り入れているということである。それらが感じられないものは私にとっては「ロック」ではない。また、判断基準が以上のようなため、私はよく知らないアーティストをイメージだけで分類することはできない。私は特に「ロック」以外のポピュラーミュージックが嫌いというわけではないが、「ロック」に分類されるアーティストの音楽をとくによく聴くことは事実である。

私にとっての「ロック」の分類基準は以上だが、これまでにその基準は変化してきており、これからも変化していくのかもしれない。以下に、ひとつの事例として私による分類を示しておく。

「ポップス」

アイドル歌手全般、「GLAY」、「B'z」、「ミスターチルドレン」、平井堅、「aiko」、

「Misia」、「ロード・オブ・メジャー」、「ウルフルズ」、「ゆず」、森山直太朗、「ジュ

ディ・アンド・マリー」、浜崎あゆみ、宇多田ヒカル

「ロック」

尾崎豊、「くるり」、「はっぴいえんど」、「ザ・ハイロウズ」、「ザ・ブルーハーツ」、「真心ブラザーズ」、「スーパーカー」、「ミッシェル・ガン・エレファント」、「ブランキー・ジェット・シティー」、「バ

ンプ・オブ・チキン」、「レディオヘッド」、ボブ・ディラン、「ビートルズ」、「ローリングストーンズ」、
「U2」、「グリーンデイ」

ポッポス

マイトル (※7)

淡崎 (※2)

ウタタ (※2)

手井けん (※6)

aiko (※7)

Misia

ゆき

ウルフルス (※) F ⑦ - ④ -

ミスル (※) 正 ② ④ T

スピッツ (※) F ④ ④ -

治田マコ F T -

尾崎 T T -

パンフ - F T

X - T -

GLAY F T -

B'z F T -

森山

19 F -

175R T - T

ロート T T

~~ユニオン~~

ビーズン

ハイス

山崎まき

ササニ F

ロック

くろ

スバ

はっぴいえんど

RC

少年+イフ

レニオハット

ディラン

ジミヘン

フエーバリー

・トアス

第三章 まとめと考察

この論文では現在の日本の大衆音楽のジャンル分けについて、特にロックと呼ばれる音楽に焦点を当てて論じてきた。

第一章では音楽ジャンルとしての「ロック」と「ポップス」の定義をめぐって、両者の発展のしかたの違いを述べた。ロックとは1950年代にアメリカで生まれ、日本では常にポップス界に反抗することで音楽形式的な発展を遂げてきた音楽である。またポップスとは、大衆の支持を得るために「わかりやすい」ことを第一の目的とし、そのためにあらゆる流行を取り入れることで発展してきた音楽である。要するに分類概念として考えた場合「ポップス」は消費形態を基準とした分類概念であり、音楽形式や精神性にに基づいた分類概念である「ロック」とは根本的に異なっているということであった。しかしレコード会社やレコード店においてはそのような基準に基づいてジャンル分けされているわけではなく、消費者の混乱を避けるために「ロック」と「ポップス」がひとまとめにされているのである。そして「ロック」と「ポップス」がひとまとめにされることによって、消費者における両者の境界の認識があいまいなものとなっていることもまた事実である。

第二章では聞き取り調査をもとに消費者であるリスナーが「ロック」と「ポップス」を分類する際に何を基準にしているかを分析した。リスナーの分類基準は人それぞれに違ったが、大きくわけてロックにこだわりをもつ「ロック寄りの人」と、特にロックにはこだわりをもたず、ポップスを中心に音楽を享受している「ポップス寄りの人」の二種類に分けることができる。「ロック寄りの人」は「ロック」と「ポップス」を明確に区別しており、「ポップス寄りの人」は「ロック」と「ポップス」をあいまいにしか区別していないのである。「ロック寄りの人」は一概に「売れている音楽」である「ポップス」と、「自分が『ロック』だと思える音楽」を別している。区別する際の基準は音楽形式、かっこよさ、個性、精神性などの、個々人の感覚による判断に由来したものである。区別の基準が個々人の感覚によるものなので、人によって「ロック」に分類されるアーティストと「ポップス」に分類されるアーティストが違っている。それに対して「ポップス寄りの人」が「ロック」と「ポップス」を区別する際の基準は音楽形式と、テレビや雑誌によって植えつけられたアーティストのイメージである。つまりは、「ロック寄りの人」は見た目や音楽形式などの外面的なものだけでなく、それよりも音楽を追究するといったアーティストの姿勢や歌詞などにあらわれる精神性や個性という、アーティストの「内面」を重視する傾向にあるといえる。そして「ポップス寄りの人」は聴きやすさや見た目のかっこよさなどの「外面的」なものを求める傾向にあるといえる。そのため、「ポップス寄りの人」はロックに限らず、幅広いスタイルの聴きやすい音楽を受け入れ、それに対して「ロック寄りの人」は自分が「ロック」だと認めた音楽しか受け入れない。

このことをロックという音楽を中心に考えると、「ポップス寄りの人」はかっこよさ、個性、精神性といった基準をもたないので「ロック寄りの人」と比べて、「ロック」の分類基

準が「あまい」といえるだろう。それゆえ、「ロック寄りの人」が「ポップス」に分類しているアーティストを、「ポップス寄りの人」は「ロック」に分類している場合がある。この、音楽に対するふたつの姿勢の対照性は、両者によって現実にあるアーティストが「ロック」または「ポップス」のいずれに分類されるかを見るとよりはっきりする。リスナーによる分類を総合的に見ると、両者ともに「ポップス」に分類するアーティストと、両者ともに「ロック」に分類するアーティスト、そして個人によって「ロック」に分類されたり「ポップス」に分類されたりしてあいまいなものの三種類に分けられる。それら三種類を「ポップス」、「ロック」、「あいまいなもの」として代表的なアーティストをあげながら考察する。

リスナーが「ポップス」に分類するアーティストは「アイドル」と「非ロック系アーティスト」のふたつに分けられる。「アイドル」の代表は「SMAP」、「TOKIO」、「モーニング娘。」などであるが、彼らに共通することはアーティストとしての個性がなく、「やりたい音楽」というものをもたない、「わかりやすさ」を重視した「売れるための」商業主義的な音楽を体現しているということである。「SMAP」と「モーニング娘。」は自ら作調や作曲、楽器の演奏をすることはなく、また彼らの音楽形式に一貫するものはない。そして「TOKIO」は各自が担当する楽器をもち、バンドというスタイルを取り入れてはいるが、作詞や作曲はおこなわない。また頻繁にバラエティ番組やテレビドラマに登場することも彼らに共通することである。彼らはプロデューサーや所属事務所の意向で、その時代ごとの流行音楽を取り入れることによって常に大衆の支持を得てきたのだ。「アイドル」たちは「大衆に支持されるための音楽」という点で日本のポップスを象徴する存在であるといえる。また平井堅、「Misia」、「ゆず」、森山直太朗らに代表される「非ロック系アーティスト」とは文字通り、音楽形式が明らかにロックとは違うアーティストたちである。彼らはアーティストとしての個性を意識した音楽活動を展開しているアーティストたちで、アイドルとは異なる。しかし音楽形式的にはヒップホップやソウル、フォークなどであり、「ロック」には分類することができないため「ポップス」として分類されたアーティストたちなのである。

「ロック」に分類された代表的なアーティストは矢沢永吉、「ミッシェル・ガン・エレファント」、「ブランキー・ジェット・シティ」、「ザ・ハイロウズ」などである、彼らはリスナーの「ロック」における分類基準である音楽形式、アーティストのイメージ、個性、精神性をすべて満たしているといえるだろう。矢沢永吉は日本のロックの代名詞のような存在であり、コアなファンが多いことでも有名である。「ミッシェル・ガン・エレファント」は黒いサングラスに黒いタイトなスーツといった反社会的なファッションをトレードマークとしており、また音楽形式や歌詞においても攻撃的なものがほとんどである。「ブランキー・ジェット・シティ」は1980年代末のバンドブーム時代に登場したバンドであるが、音楽形式よりも衣装やメイクでの過剰な自己演出にはしりがちであったその時代のバンドの中で、自分たちの音楽を追及していった数少ないバンドのひとつである。「ザ・ハイ

「ロウズ」は青春を歌った楽曲が特に有名だが、彼らの楽曲の中には直接的に社会を批判する内容のものも多くみられる。また「ロック」に分類されたアーティストたちは共通してライブやレコーディングなどの音楽活動を精力的におこなっており、テレビ番組にはほとんど登場しない。つまり彼らは「ロックな」イメージ、自分たちのロックを追究する姿勢、わかりやすさを求めない反抗的な歌詞などをもったアーティストたちで、いわば日本のロック界のカリスマ的アーティストなのである。また、「ロック」に分類された中には、英米のアーティストが目立つ。「ポップス」の分類においては英米のアーティストは登場しなかった。この理由は、英米のアーティストが日本のヒットチャートの上位に登場することが非常にまれであり、「ポップス」とみなされにくいことと、「ロックといえば英米」というイメージが根強く残っているためであると考えられる。

「あいまいなもの」とは人によって「ポップス」に分類されたり、「ロック」に分類されたり、はたまた「ロック」であり「ポップス」であるという扱いを受け、「ロック」と「ポップス」の中間にいるといえるアーティストたちである。その代表的なアーティストは「ミスターチルドレン」、「サザン・オールスターズ」、「GLAY」、「B'z」、「175R」などである。彼らは「ロック寄りの人」による分類では「ポップス」に、「ポップス寄りの人」による分類では「ロック」に分類されたアーティストたちである。彼らの音楽は皆、音楽形式的にはロックであるといえる。それゆえ、「ポップス寄りの人」による分類では彼らは「ロック」に含まれる。しかし彼らは「ロック寄りの人」による分類基準を満たしてはいないのである。すなわち反社会的な精神性、個性が足りないのである。たとえば彼らの歌詞には恋愛や人生、青春をうたった内容のものが多く、直接的に社会に反抗するような内容は見られない。その点で、「ロック寄りの人」たちの「ロック」における分類基準である反社会的な精神性を満たしていないといえる。個性という面ではどうだろうか。個性を考える場合には「売れているか否か」が重要となる。つまりは十分に個性をもったアーティストでも、売れることによってそのアーティストの個性を真似た新たなアーティストが多く現れ、そういったアーティストの登場により、個性が個性ではなくなってしまうという現象が起こるのである。「あいまいなもの」に分類されたアーティストたちは皆、大衆の支持を得ており彼らの音楽は実際に売れている。「売れること」で個性の失われたアーティストが「ロック寄りの人」たちにとっては個性が足りないと感じられ、「ポップス」に分類されるのだろう。また、「175R」に代表されるように「あいまいなもの」の中には最近新しく登場したアーティストが含まれる。それらのアーティストにはまだある一定のイメージが出来ておらず、また世に出ている楽曲もまだ少ないため、リスナーは彼らが「ポップス」であるか「ロック」であるか今の時点では判断しかねているのであろう。

この論文ではロックに焦点を当てて述べてきたが、ロック以外の大衆音楽に注目した場合にも同様にあいまいなものが表れてくるだろう、このあいまいさは、ロックとポップスの双方が互いに影響しあって発展してきたという歴史的な積み重ねと、リスナーによっては音楽形式が重要視されず、個々人の感覚によって分類の定義が異なることに起因するも

のである。

この論文は音楽のジャンルを規定することを目的としているわけではない。音楽のジャンルを規定することが音楽の本質とは全く関係がないことは私自身自覚している。しかし音楽のジャンルの違いがリスナーの間であいまいに認識されていることは事実であり、その認識のあいまいさを調査し、分析することは音楽文化の構造を知る上で重要なことだと私は思うのである。

音楽文化は生産者としてのアーティスト、レコード会社、消費者としてのリスナーが相互作用しながら作り上げるものであるが、その過程で独特な構造が形作られる。この構造を考える上で「コアな文化」、「マスな文化」という区別が有効であるように思う。「コアな文化」とは少数派の閉鎖的な文化であり、ある種カルト的な特徴をもっている。本論では「ロック」にこだわる人々の価値観や趣味がそれに当たる。「コアな文化」に属している人々は「マスな文化」を自分たちの文化と差別化しようという傾向にある。「ロック」を好むリスナーたちが「ロック」と「ポップス」を明確に区別しようとする意識がそこにあらわれている。そして「マスな文化」とは文字通り大衆の文化で「コアな文化」を含めた大規模な文化のことである。ここでは「ポップス」を消費する人々の価値観や趣味がそれに当たる。「マスな文化」に属する人々は「コアな文化」を特別に区別しようとはしないが、一歩引いた視点で「コアな文化」を眺めている。これらふたつの文化は相互に作用しあって形成されているため、まったく切り離して考えることはできない。「コアな文化」としての「ロック」はもともと存在しなかった。日本でロックという音楽そのものは「マスな文化」としての「ポップス」の土壌の中で育ってきた。ロックが若者文化に受け入れられ発展する中で、反抗心や個性のような精神性によって音楽を判断しようとする価値基準が生まれてきた。その価値基準にこだわろうとする人々が「コアな文化」としての「ロック」を作り出したのである。この「ロック」という文化的価値観を支持する人たちは他の「ポップス」と「ロック」を差別化し、企業の思惑や流行に左右されない独自の文化としての「ロック」を確立したいと考えている。最終的には現代におけるクラシック音楽のような位置を獲得したいと望んでいるのかもしれない。現代におけるクラシック音楽は流行や企業の思惑に左右されることもなく、ひとつの音楽として確立されている。ただ、クラシックとは違い、ロックは歴史も浅く発展途上で、「ポップスに対する反抗」というスタンスで発展してきたため、ポップスに対して緊張関係にある。一方「マスな文化」としての「ポップス」の視点からは、「コアな文化」としての「ロック」は、存在はしていると認識されるものの、その実態はあいまいにしか把握されていない。「ロック」は「ポップス」に反抗して常に新しい音楽を作り出すことで発展してきた。一方で「ポップス」は「ポップスへの反抗であるロック」によって生み出された新しい音楽形式の中から、「売れるもの」、「わかりやすいもの」を抽出し、吸収して発展してきた。これらふたつの文化は互いに影響しあって、売り手と買い手の好みを左右しながらジャンルを作り出している。

本来、音楽ジャンルとは音楽形式による分類を基盤に形成されるべきものである。しか

アーティストのリスト

本文中に紹介できなかったアーティストについての簡単な説明を以下に示す。(あいうえお順)

aiko	大阪生まれのシンガーソングライターで、1998年にデビューする。シングル『花火』が大ヒットし、全国的に注目される。等身大の自分を表現した歌詞が特に女性に支持されている。
アジアン・カンフー・ジェネレーション	ボーカル兼ギターの後藤正文、ギターの喜多建介、ベースの山田貴洋、ドラムの伊地知潔の4人からなるバンド。2003年にミニアルバム『崩壊アンプリファー』でメジャーデビューし、若者の絶大な支持を得る。
175R	「イナゴライダー」と読む。1998年に北九州で結成された男性4人組のバンドである。インディーズ・シーンでの活動で人気を博し、2003年のデビューシングル『ハッピーライフ』がオリコンチャートで初登場1位を記録する。
UA	「ウーア」と読む。1995年にデビューする。独特の歌声とソウル、R&B、ダブなどのスタイルを取り入れた音楽が人気の女性歌手である。
ウルフルズ	1992年にシングル『やぶれかぶれ』でデビューした男性 4人組のバンド。ソウル、ファンクに影響を受け、1995年にはディスコビートを取り入れたシングル『ガッツだぜ』がヒットした。
エゴ・ラッピン	1996年に大阪で結成されたボーカルの中納良恵とギターの森雅樹からなる男女デュオである。ソウル、ジャズ、ロック、昭和歌謡といった様々な要素を取り入れたサウンドが特徴的である。
X JAPAN	2002年のシングル『くちばしにチェリー』がテレビドラマの主題歌に使われヒットする。日本のビジュアル系バンドの先駆的存在である。派手なルックスと、ヘビーメタルを基にした確かな音楽性で絶大な人気を誇る。1989年のデビューから97年の解散までにリリースされたアルバムは4枚と少ないが、彼らが日本の音楽シーンに与えた影響は大きい。
尾崎豊	1983年にアルバム『17歳の地図』でデビューした。10代の若者に特有の孤独感、焦燥感をストレートに歌い、特に若者の絶大な支持を得る。
オレンジ・ペロー	1992年に他界した。1998年に結成された関西発の男女デュオである。ジャズ、ソウル、ボサノバといったエッセンスを昇華したクロスオーバーな音楽を聴かせる。
Kinki Kids	2002年にシングル『Happy Valley』でメジャーデビューを果たした。男性アイドルデュオである。1993年に結成される。音楽バラエティ番組のメインパーソナリティを勤め、吉田拓郎や坂崎幸之助らミュージシャンとの交流も深い。
くるり	1996年、京都にて結成され、1998年にデビューする。1960年から70年代のフォーク、ハードロックの影響を感じさせるサウンドは、日本のポスト・ロックの先駆けとなった。

GLAY	ギタリストの加入、ドラマーの脱退を経て現在は男性3人組である。1994年にデビューした男性5人のバンド。数々のCDを大ヒットさせ、1999年に幕張メッセでおこなわれたライブでは観客動員数20万人を記録する。
斎藤和義	ギター弾き語りというスタイルで1993年にデビューする。1996年のアルバム『Fire Dog』以降はロック志向の強い作品を発表している。
サザンオールスターズ	1978年に『勝手にシンドバッド』でデビューし、現在まで日本のポップス界を牽引しつづける。文法や文脈よりも語感のよさに重きを置いた歌詞は日本の音楽シーンに多大な影響を与えた。
サディスティック・ミカ・バンド	「フォーク・クルセダーズ」のメンバーであった加藤和彦を中心に結成され、「日本最古のハードロックバンド」として認められている。1972年に『サイクリング・ブギ』でデビューを果たす。日本の風情をハードロック、ファンク、フュージョンなど当時の先端をいく音楽のなかで表現した。
ザ・ハイロウズ	1975年に解散したが、1989年に一時的に再結成し『天晴』を発表、大ヒットとなった。1995年に「ザ・ブルーハーツ」の主要メンバーであったボーカルの甲本ヒロト、ギターの真島昌利を中心に結成される。「ザ・ブルーハーツ」のスタイルを踏襲しながらもより「ロックな」サウンドを表現している。
ザ・ブルーハーツ	1887年にデビューした男性4人組のバンドである。激しいサウンドと、青春をストレートに表現した歌詞で若者の圧倒的な支持を得る。
少年ナイフ	1995年に解散した。海外で最も有名な日本人女性バンドである。「ニルヴァーナ」の散カート・コバーンは彼女らの熱心なファンであった。1986年にアメリカデビューを果たす。
ジュディ・アンド・マリー	以降、アメリカを中心に活動し、19日2年からはアメリカ、日本国内の両拠点にて精力的な活動をおこなっている。「ジューク」と読む。「ジュークボックス」と、大人でも子供でもない「19歳」を名前の由来とした3人組のコラボレーション・ユニットである。イラストレーターの「326（ミツルと読む）」による青春をテーマにした歌詞が10代のリスナーに絶大な支持を得る。2002年に解散した。1993年にデビューしたボーカルのYUKI、ギターのTAKUYA、ベースの恩田快人、ドラムの五十嵐公太の男女4人からなるバンドである。1996年にシングル『そばかす』が100万枚を超えるセールスを記録する。
スーパーカー	2001年に解散した。ボーカル、ギターの中村弘二、ギターのいしわたり淳治、ベースのフルカワミキ、ドラムの田沢公大の4人からなる青森県出身のバンドである。1997年にシングル『クリームソーダ』でデビューする。
スピッツ	シンプルなギターアンサンブルから年を経るごとにテクノの影響を強く受けるようになるボーカルの草野マサムネ、ギターの三輪テツヤ、ベースの田村明浩、ドラムの崎山龍男の4人からなるバンドである。1991年にシングル『ヒバリのころ』でデビューし、清涼感のある歌声と、独特な世界観を持つ歌詞が人気を博す。

ソフィア	1995年のシングル『ロビンソン』が大ヒットした。1990年代のビジュアル系バンドブームの時代にデビューしたバンドである。ブームの終焉とともにバンドの方向性を転換し、洋楽志向を強く打ち出し始める。ボーカルの松岡充は映画やテレビドラマで役者としても活躍している。
ZONE	歌って踊れて、楽器も弾けるという次世代アイドル「バンドル」というコンセプトのもとに結成された女性4人組のバンドである。2001年のシングル『secret base〜君がくれたもの〜』がヒットした。
DA PUMP	「ダ・パンプ」と読む。沖縄出身の ISSA、YUKINARI、KEN、SHINOBUの歌って踊れる4人組として1997年にシングル『フィーリン・グッド』でデビューした。TVやCMにも頻繁に登場し、コミカルなキャラクターと日本人離れしたリズム感をもち、発売されたCDはヒットを連発する。
chara	1968年生まれのシンガーソングライター。愛をテーマにした歌詞と、ソウル、R&Bに影響を受けたサウンドが特に女性の支持を得る。
TOKIO	5人組の男性アイドルグループである。1994年にデビューした。ボーカル、ギター、キーボード、ベース、ドラムスというバンドスタイルを取り入れている。
バンブ・オブ・チキン	1996年に結成された男性4人からなるバンドである。2000年に『ダイヤモンド』でメジャーデビューを果たす。ボーカルの原基央による文芸的な歌詞が特徴的である。2001年に発売されたシングル『天体観測』がヒットした。
B'	「ビーズ」と読む。稲葉浩志、松本孝弘からなる男性二人組で、1988年にデビューする。B'zとしてCDを大ヒットさせる一方、精力的にソロ活動もおこなっている。
ピチカートファイブ	1984年に小西康陽を中心とした4人で結成される。ソウル、ボサノバ、ハウスなどの様々な音楽スタイルを取り入れた音楽は海外でも高い評価を得る。
ブラフマン	2001年に解散した。ボーカルの TOSHI-LOW、ギターのKOHKI、ベースの MAKOTO、ドラムのRONZIの4人組からなるバンドである。1996年にデビューする。パンクを基本としながらも沖縄、南欧、北欧、東南アジアなどの民族音楽を取り入れ、独特のサウンドを作り出している。
ブランキー・ジェット・シティー FLOW	1990年にボーカル兼ギターの浅井健一、ベースの照井利幸、ドラムの中井達也の3人によって結成され、独特の歌声と卓越した演奏技術でたちまち人気者になる。2000年に解散した。ボーカルのKOHSHI、同じくボーカルのKEIGO、ギターのTAKE、ベースの GOT'S、ドラムの IWASAKIの5人からなるバンドである。
Misia	2003年1月に海援隊のカバー曲『贈る言葉』がインディーズながら異例のヒットを記録し、7月にはメジャーデビューを果たす。「ミーシャ」と読む。現在の女性R&B ブームの火付け役的存在である。1998年にシングル『つつみ込むように…』でデビューする。同年のアルバム「Mother Pather Brother Sister」が250万枚を超える売上げを記録した。

ミスターチルドレン	1989年にボーカルの桜井和寿、ギターの田原健一、ベースの中川敬輔、ドラムの鈴木英哉の4人によって結成され、1992年小林武史プロデュースのミニアルバム『EVERYTHING』でデビューする。
モーニング娘。	以後、日本を代表するアーティストとして不動の地位を確立する。女性アイドルグループである。1998年に5人でデビューした。メンバーの増員、脱退を繰り返して現在は12人となる。
森山直太朗	数々のテレビ番組に出演し、国民的人気を博す。1976年生まれのスィングソングライターである。高音での表現力豊かな声が特徴的である。2003年に『さくら』が大ヒットし、卒業シーズンの新たなスタンダードソングとなった。
矢沢永吉	1949年に広島で生まれた。1975年に、それまで在籍していたバンド「キャロル」を解散した後、渡米してアルバム『I LOVE YOU, OK』を発売する。マイクスタンドを振り回す派手なライブ・パフォーマンスや哀愁漂うバラードなどで、日本のロック界のカリスマ的存在となる。
山口百恵	1977年に日本人ロックミュージシャンとして初の日本武道館でのライブを成功させた。1973年にデビューしたアイドル歌手である。テレビドラマや映画にも多数出演する。1980年、結婚のため21歳で引退し、その後は芸能活動をおこなっていないが、今も根強い人気がある。
ゆず	横浜のストリートミュージシャンとして活動していた北川悠化と岩沢厚治によって結成された。ロコミを通して支持を得た彼らは1998年にミニアルバム『ゆずマン』でメジャーデビューを果たす。フォークギターをメインとしたアコースティックなサウンドは日本のニューフォークと呼ばれる。
ロード・オブ・メジャー	テレビ番組「ハマラジャ」内の企画によって誕生したバンドである。2002年のデビューシングル『大切なもの』が大ヒットした。

文献リスト

文献リスト

岡村詩野他、2004、「特集 日本音楽の現在、ロック、ポスト・ロック」『MUSICMAGAZINE』 36 (12)、株式会社ミュージック・マガジン、pp.24-29.兼田達矢他、2004.「Jポップの軌跡 80s～90sムーブメントを振り返る」、林田琢二編『ニュー・スタンダード・オブ・Jポップ300』、ぴあ株式会社、pp.30-37.篠原章、1996.『J-ROCK ベスト123』、講談社、447p.三井徹・北中正和・藤田正・脇谷浩昭編、2000.『クロニクル 20世紀のポピュラー音楽』、平凡社、pp.92-253.みつとみ俊郎、1999.『音楽ジャンルって何だろう』、新潮選書、241p.

本PDFは、2005年に提出された卒業論文の原本（紙）をスキャンし、文字を起こして組み直したものです。判読の誤りや、原本にあった明らかな誤字（人名の表記など）は改めましたが、論の内容、構成、文体は原文のままです。手書きの分類メモは原本の画像をそのまま収めました。